



インタビュー

やのさとじ  
矢野智司氏

京都大学大学院教授、教育人間学。人間の成長、幼児期の遊びの意味を探求。『意味が躍動する生とは何か—遊ぶ子どもの人間学』(世織書房)、『動物絵本をめぐる冒険』(勁草書房)ほか、著書多数。

特集  
問い合わせ

## 幼児期は「準備期」？

今回のテーマは「幼児期は『準備期』？」です。

保育現場では、子どもが自由に遊ぶことを大切にしていますが、小学校の先生が「たくさん遊んで準備してきてください」と言うのはあまり聞きません。矢野先生は、子どもが目的性なしに無心に遊ぶことに大きな人間学的意味を感じておられ、このインタビューの始まる直前にも幼稚園の子どもたちが遊ぶのを面白そうに観察されていました。「考える」コーナーではそれぞれのお立場から、松木先生、向山先生、柳瀬先生にご寄稿いただきました。

さて、この特集「問い合わせ」は最終回ですが、「あたりまえ要注意」の視点は今後も持ち続けていきたいと思います。

聞き手 伊集院理子(お茶の水女子大学附属幼稚園)

浜口順子(本誌編集委員)

## 幼児教育の独自性はどこにあるか

伊集院 今回のテーマの中の「？」がすごく大事だと思うんです。幼小の接続に焦点が当たるようになって、「幼児期の学校教育」と言い直したりして、現場の人間として違和感を感じているのですが……。

矢野 幼児教育に限らず、教育は何らかの準備であり、むしろ準備でないような教育はありません。しかし、次のステージへの準備が教育のすべてなのかと言われば、そうではない。問題は、幼児教育の独自性をどう考えるかということに帰着するのではないかと思います。小学校教育に回収することができない独自性が幼児教育にあるとしたら、それは單なる準備とは言えないはずです。しかし、小学校教育との関係だけで幼児教育の独自性を考えることは、かえつて幼児教育を人間の成長の全体から孤立させると恐れがあります。むしろ、人間の成長全体において、幼児教育がどのような意味や特色を持っているのかというところでとらえ直す必要があるのだと思

います。

人間の全体の成長や教育を考えた時に、幼児教育はその出発点にあたりますが、単に始まりというだけではなく、一つの極限の教育の形を示しているのではないかと思うのです。

## 教育の一いつの次元と遊び

矢野 私は、教育を二つの次元に分けて考えてきました。一つは、発達という言葉で言われてきた、社会的な有能性を高めていく次元。それからもう一つは、人間が生きていることの根源に絶えず触れていく、生命性を深めていく次元です。この生命性の次元が一番強調された教育の形として立ち現われるのが、幼児教育であると考えます。

この生命性に最も深く関与している事柄が遊びです。もちろん遊びは、生命性の次元だけではなくて、これまでの幼児教育では、遊びが結果としてもたらす発達に強調点が置かれてきました。しかしながら、

遊びを通してさまざまな有能性を高めていくという考えに一元化していくと、遊びが生み出す生命的な次元を矮小化してしまいます。遊びが手段化されてしまします。むしろ、遊びが遊びであることの根源は、生命性とつながっていることです。

この生命性を深めることができが、後の学校教育での「勉強」や「学力」につながっています。一見つながっているように見えないものが、つながっているということを、小学校、中学校の先生たちは忘れているのだと思います。

生命性を深めることを大切にしてきた幼児教育から小学校教育・中学校教育を見直した時に、どういったことが言えるのかといふことの中に、「準備」ということの新たな意味が出てくるのではないかと考えます。

## 生命性という考え方

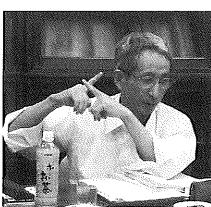
伊集院 私たちも十年前から、幼稚園での遊びを小学校につなげていくにはどうしていけばよいの

かを考えてきましたが、どうしても小学校教育のほうに飲み込まれるになります。そうならない防波堤のような考え方だと言える「生命性」ということに矢野先生が着眼なさったのは、どうしてだったのですか？



▲伊集院理子氏

矢野 社会学者の作田啓一先生が「溶解体験」という用語をつくり、その言葉を初めは批判的にとらえていたのですが、生きた形でこの概念を使えるようになった時に、さまざまなもののが変わってきたのです。深く遊び込んでいる時には自分と世界との境界線がなくなりますが、このような体験を溶解体験と呼びます。音楽を聴いている時、風景に見とれてしまうような時にも、このような体験が生じますが、この時、私たちは比類のない喜びを感じます。それは世界との十全なコミュニケーションが生じている瞬間です。フレーベルの言っていた「一生の合一」もこの溶解体験のことだと考えると、フレーベルの教育論もすごく納得がいきます。



▲矢野智司氏

社会的な能力を高めていくという教育の次元は当然重要ですから、この溶解体験によつて実現される生命性の次元が、発達の次元とどう関係していくのか、教育学者としてそこを考えざるを得なかつたわけです。

## わかりにくさを学問にしていく

伊集院 子どもつて、本当に日々生きているんです。それをどう学問に上げていくかというのが難しくて。

矢野

有能性の次元についての学問が発展したのは、発達の事象が觀察可能で、測定可能だつたからです。外から遊びを觀察することによって、さまざまに有益な知見を見いだしてきました。逆に、子どもが喜びに触れている溶解体験の訳のわからなさと

二つの次元が立体的な関係をつくることで十全な教育世界が成立しているということを明確にすることです。そうすることで、幼児教育の独自性を擁護できるのではないかと思います。

その考察の一つが、小学校、中学校のカリキュラムの中にも働いている生命的な次元を見いだし、それらが幼児の遊びと深くかかわっているということを示していくことです。

例えば、宮沢賢治の「雪渡り」を三行で要約したところで、その物語を生きることにはなりません。「キック、キック、トントン。キック、キック、トン」というオノマトペ、あそこで物語を生きられるかどうかがかかるつているのです。そういうリズム性は幼児期の言葉とつながつていて、幼児期に培

現場の先生とそうでない先生のわかり方が違つていで、私の仕事は、そうでない人も納得できる理論をつくることだと思っています。なぜ発達にかかる用語群では生命的次元を説明できないのかということも含めて、生命的の次元のあり方を明らかにして、

つしていく身体的言語から伸びていくわけです。「キック、キック、トントン」は、身体的に跳ねる音ですよね。身体とつながった時に初めてわかるわけです。リズムを持った詩的な言葉の教育は、遊びによって育まれた身体性に基づいています。

## 生命性と有用性

浜口 子どもの生命性に気付けるかそうでないかは、その人の生きてきた歴史と関係がある。また、時間的にとても忙しいカリキュラムの幼稚園だと、生命的に生きている子どもの姿が気付かれにくく、生命性というのはただの概念になってしまいます。変な話ですが、「生命性を大事にするところな良いことがあります」とか言えると、もっと、子どもの生命性にみなが目を見開こうとすると思うのですが。

矢野 生命性を深めることができますが、発達の基盤になります、ということは言えますが、だから生命性が重要ですと言ふことはできません。

います。「愛」は有用性の次元とは全く違うのです。有用性は交換の次元で、「愛」というのは交換を超えて贈与することです。何かしてあげると何かしてもらえるのが交換ですが、「愛」は見返りなく与えることで、交換の世界を否定するものです。同様に、遊びが、有用なことに用いることのできる時間やエネルギーを惜しげもなく消費するように、生命性の次元は有能性の次元を否定します。ですから発達のために生命性が重要ですと言つてしまふと、生命性の次元は、有能性を高めるための単なる手段になってしまい、そのことで生命性は、本来の力や輝きを失ってしまいます。有用性（役に立つ）とは異なる次元を考えることができるかどうかが、経済的価値が支配的な今日の社会にとつて、とても重要な課題だと思います。

## 生命性と時間

矢野 自由な時間の保障は、幼児教育が何であるかの大きな特徴の一つだと考えます。

幼児教育では、段ボールや積み木など、いろいろな物を用意していますが、それを使って子どもたちが何をすべきか規定していません。行為の方向付けはありますぐ、具体的な内容は確定していない。すると、子どもは自由な行為の中で冒険、探検ができる。冒険は未知を生み出していきますから、予想もしなかつたことがそこで開かれていくわけです。学校のように狭い範囲で解答が確定する問題解決の状況ではなく、幼児教育は自由な行為を保障し、子どもに新たなものを生み出す経験、そして失敗する経験の機会を与えているのです。そういう経験を持たない子どもに、最初から学校教育みたいなものをやつたら、子どもは与えられた課題に対して答える受け身的な存在でしかなくなってしまいます。放つておくのではなく、ちゃんと子どもが自己活動できる時間を保障し、子どもを冒険へと誘う魅力的な環境（メディア）を整え、自分で活動することによって自分の活動の結果を評価することができるような状況を用意することが重要です。

## 遊び文化の伝達

伊集院 矢野先生はこのごろ「メディア」という言葉をして、道具に注目されていて、子どもたちが自分から取り組んでみたくなるように、どう、物や道具を配置するかが大事だと書かれていますね。

矢野 僕らの世代は、幼稚園に行って初めて絵本を見て、小学校で初めてカラーテレビを見た時代に育ちました。家庭でもいろいろな電子機器に囲まれている今は、幼稚園ではテレビなんか見せないで、ほかの子どもと体を動かして遊べばいいと思います。遊びための道具も遊び方も「メディア（世界とかかわる時の媒介となるもの）」だと思うのです。ブランコのように、一人で取り組むことで完結してしまう道具もありますが、ボールのように、相手がいることで、よりメディアとして価値が高まる道具もあります。ブランコにはブランコによってしか開かれないと、一人で楽しめるスイングとめまいの体験の世界があり、ボールにはボールによってしか開かれないと、

「転がし合う」「投げ合う」「パスをする」といった、ほかの子どもたちの身体と呼応する、身体体験の世界があります。

昔だったら、子ども集団で伝えられていったのでしょうけれど、今は遊び文化が子ども同士の中で伝達されていかないので、幼稚園の先生が子どもに遊び方を伝授していくことが大切です。目の前の子どもたちに何が必要か、どういう力を身につけさせるべきなのかを配慮するとともに、どういう遊びをすると、あるいはメディアを使用すると生命性の深いところまでいけるのかを工夫することは、幼稚園の先生の課題だと思います。

**浜口** 三輪車とかはあまり深まりませんよね。

**矢野** できることが狭いのでしょうかね。

**浜口** それなりに生き生きした顔になるので、一見すると生命性が發揮されているように見えるところがある。でも、「ハッ」として子どもが新しい世界に入っていくような遊びにはなりにくい。

**矢野** 浅い遊びと深い遊びがあると思います。それ

は、遊びの種類や道具の種類で最初から決まるだけではなく、導き方や子どもの数などいろいろ条件があるのだろうと思います。それでも深さや広がりをつくりにくく遊び方や道具があるのかもしれません。

**伊集院** 既成の物に遊ばれているという感じではない遊具を私たちは選んでいます。その先を子どもたちがつくつしていく。つくり出していく主体はあくまでも子どもたちなのです。

**浜口** 「ダンス」もつくっていますよね。

**矢野** 体も道具（メディア）です。体は道具を使う道具です。最初は何か手に持つて踊っていたのを、持たなくとも踊れるようになるのは、体 자체を道具として使うことができるようになったからです。

**浜口** 歌を歌うことも。

**矢野** そうですね。声は身体から発せられます。歌を歌うことは、人を深い次元へと導いていきます。歌があることで、声が生命的な広がりと深さとを獲得します。声は呼吸と結び付いていますが、呼吸は人間が意識的にコントロールできる唯一の内臓の働く



▲浜口順子氏

きとつながっており、宗教的な修行もこのことを重視してきました。子どもは歌をつくりたり、ダンスをつくりたりすることで、修行者のように、世界との深いつながりを味わっているのだと考えます。こういったメディアとしての歌やダンスは、幼児教育の中で育まれてきたものです。

## 生命性の次元を求め続ける

浜口 「準備期」に話を戻すと、意図された環境の中で、幼稚園では自由に教材を使って子どもが何かをつくるけれど、小学校は、教科書に始まって、大人によつて目的が明確化された教材が多いと思います。発達段階的に教材の質が変わっていくことは致し方ないと思いますが、今の話のような広い意味で「つくる」ということを学習できれば、生命性の部分を大事にできて、幼小中高とつながつていくと思うのですが……。

矢野 その点については、小中

高の先生も賛同してもらえると思います。でも、つくるものが直接に有用なことと結び付かなくてもいい、言いだすと、学校の先生は納得しにくいのでしょうかね。

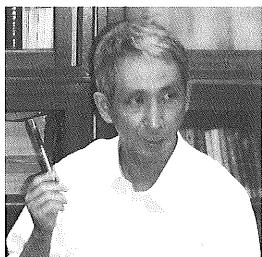
浜口 学校は時間の制限がありますからね。

伊集院 思つたことをやつていいんだよ、という雰囲気をつくり出すと、子どもたちはどんどん力を發揮していくてくれるんですが。そのあたりを学校の先生たちにわかつてもらいたい。

浜口 幼稚園つて、教師だけでなくいろいろな人間が入つて、子どもたちは大人の魅力を浴びて生きていますよね。

矢野 自分が誰に遊び方を教えてもらつたかを思い返してみると、はじめは親や地域の人たちです。教えている側は教えているという意識ではなく、まさに贈与的なものだつたと思います。

『わすれられない おくりもの』という絵本があります。アナグマさんが教えるのは、ビスケットの焼き方やネクタイの締め方など、知らなくても生きて



いけるけど、知つていると生活が豊かになるものであります。キツネは自分で工夫して、もつとネクタイの締め方がうまくなる。ウサギも工夫してビスケットの焼き方がうまくなる。自分で工夫して、教えてもらったことをさらに豊かにしていく。そして、今度は、キツネが教える側になつていくのです。文化はこういうふうに世代を超えて伝達されてきたのだと思ひます。遊びの伝授ほど純粋贈与のわかりやすい例はないです。教える者は教えてやつたと思つていないし、教わるほうも恩義なんか感じないで喜びだけがそこにあり、教えてもらった遊び方を次の人へ教えます。贈与のリレーが、周囲の大人によつてごく普通に行われてきた。

### 伊集院

仕組まれた場だと、なかなか入り込めないついでありますね。

### 矢野

発達的な次元とは異なる生命性の次元が見えてきます。きれいに計画を立ててしまつ

まうとうまくいかないで、偶然が重なることで面白いと思う瞬間が立ち上がつてくることがありますね。幼児教育の先生は、そのような瞬間をとらえるのがうまいように思います。子どもの遊びの流れのようないものを、敏感にとらえようとしているように思います。

### 浜口

小学校では、偶然ばっかり生かしていくと網羅せず抜け落ちてしまうでしょ、となつていく。

### 伊集院

そのあたりで、矢野先生は、深く生命性に触れるような体験をしていくことが準備だとおつしやつてくれているんだと思うんです。矢野先生の本の中に「生命に触れる教育は子どもの人生全体を根底で支える教育である。子どもに生命と連なる幸福で根本的な存在の感覚を与えることは、幼児教育において最も大切なことの一つだ。」という文章があつたのですが、幼児にとっては、存在の感覚、存在感というものが何といつても大事ですね。学校に行つても存在感を持ち続けてほしいと、祈るような気持